

絹の需要増進について

清水学園専門学校 学園長 清 水 と き

きもの総論

「きもの総論」 — 参考資料 —

清水とさ

(現) 日本きもの文化協会 会長

とさ・きものクリエイティブ 所長

(旧) 清水学園専門学校 校長

東京都港区南青山1-6-8 ☎03(400)0286

⑦

“きもの”は誰のための衣裳か

- ・ いまでも多く、日本人が心ゆく伝統文化 —— 日本人の衣によって創られ —— 日本女性のための衣裳であり —— 日本女性を もっとも美しく見せるもの。
- ・ それは、世界の人々が認めている最高の民俗衣裳 —— こんな素晴らしい衣裳は他にはない。
- ・ 糸を紡ぐ、織る、染める、揃く、仕立てるための一針一針にその人の喜ばしと哀しみが、平絹の布地に身になろうと、たちまち、女性の、やさしさ、ゆかしさ、美しさが目に見え、あふれ、他にあるだろうか。
- ・ 日本の美しい自然が生きている衣服——きもの。木々の葉の緑、山、咲き誇る花、流れる川、秋の紅葉、一面の銀世界、鳥、月、美しい日本が息づいている。

⑧

“きもの”は時代を超えて、常に新鮮感覚

- ・ 形(デザイン)、縫製様式(柄)、染、織の技術は、世界の誰も真似し得ない絶妙の調和。伝統は着る人の肌になじみ、脈を打つ —— 生きる喜びをよびよる —— 常に、新鮮な感覚を呼びさましてくれる。
- ※ きものを着ている人を見て、古いわって誰か、いいあるか。魅かれ、いいあるか。改めて新鮮で魅力的だというでしょう。
- ※ いま、日本の伝統色の代表色「草木染」の染め色調が若い人たちに受けられている。素朴なものは素朴なものであり、新鮮なのである。
- ※ 正装といわれる、きものから、ふだん着といわれる、きものまで、それを着る人の感性で、きものは、現代の暮らしの中で、いろいろな楽しみ方ができるのである。
- ※ きものは“おんなの宝庫”。

c

これからの“きもの”の傾向

伝統的な和装(オセンティックキモノ)と新しい形の和装(ニューウェーブキモノ)

- ・ 伝統的和装素材は正絹 —— 前述はセク、日本の伝統的染織技術による
日本文化の古典とモチーフにしながら「現代」を表現したもの —— 86秋冬の和装の色・特徴は
日本の伝統色である、灰みがかった植物性染料系。(緑系、灰みのリーフ、ブルー系、紫系)

・ 注目されたニューウェーブキモノ

自由な発想で自由に着こなしてもいい —— 素材も絹である必要のない木綿、ウール、合成繊維

買いやすい価格設定 —— コーデイトもかんたん —— ヤグがターゲット(デザイナーキモノ)

自分自りの着装イメージをもっている現代の若者像

⑧ ニューウェーブキモノはきものへの入門着。きものの良さを知っていただく展開の中の入リ口。

⑨

絹織物の生産地

岩手県	紫紺染、茜染(盛岡)	愛知県	角松絞、鳴鶴絞
山形県	白雁お召(白厚)、長袖(鶴) 縮緬、 コート地(朱) 置賜縮緬	滋賀県	長岐切めん、一岐切めん
宮城県	仙台平	三重県	組紐、帯メ
福島県	踏目羽二重、裏絹(川俣)	京都府	丹後縮緬 京反裨、帯
茨城県	本場縮緬(縮緬) ヒシ絞	徳島県	
秋田県	秋田重入丈	愛媛県	
新潟県	羽二重、縮、盛模(盛)、小羽絞、塩尻召 縮緬縮、夏縮、相町縮、中振袖、訪問着 明石縮	岡山県	
富山県	羽二重、手縮、彫縮(成瀨)	鳥取県	
石川県	加賀反裨、縮子縮緬、羽重、白山縮、巾着縮	広島県	
群馬県	桐生お召、紗、縮、コート地、帯、絁着尺、裏絹、	福岡県	博多帯
埼玉県	着尺(秩)、裏絹(秩)(飯能)	宮崎県	綾の手袖
東京都	村山大島(羽山) 羽着尺、縮縮成(ハチ) 江戸小紋、組紐、京反裨、黄入丈(八丈)	佐賀県	佐賀錦
山梨県	コート地(大月、都留、高井田)	鹿児島県	大島
長野県	信州縮、上田縮、裏縮	沖縄県	紅型染、久米鼠縮
岐阜県	郡上縮		
福井県	パレス、縮子縮緬		

時代	衣服の発達の流れ
上古時代 (大和時代)	貫通衣
奈良時代 (天平文化)	最も洗練文化が花咲いた 胡服スタイル 天平の三絶頭 綾・絹・羅 綾・絹・羅 綾・絹・羅
平安時代 (貴族文化)	曙装束 (十二単)
鎌倉時代 (武家社会)	武家社会となり服装も写實的になる 小袖、裳袴、巾着、小袷、襦袢、袴、足袋、草履
室町時代	美術工芸が栄える 小袖、辻が花 (室町末期から桃山末期にかけ、小袖の発展と共に表われ、消えた装束) 縫い締めによる絞り染めに、墨、朱、ぞろぞろがきた
桃山時代	桃山小袖 (辻が花、縫箔など、胡服豪華な物、後継これに幽玄の美をもの) 豊臣秀吉の庇護のもとに美術工芸が盛んになる 織、絹、摺、縮、染、絞
江戸時代	反禅染の発生 — 室崎反禅斎 慶長小袖 (小袖全体に円形、方形、三角形、菱形などの形で区切り、紅・白・黒で染め分け、花鳥風月、器物などの文様をちり紙に配し、当時の染織技術のすべてを尽くして作られた) 元禄小袖 (鹿の子・濃草など刺繍で文様を表わした) 振袖誕生 (元禄前の未婚の男女が着た) 丈一・不浴・豊文 1尺5寸、前後左右合わせ2尺6寸となるので6尺袖と称し流行した 貞享 2尺、享保 2尺4寸~5寸、宝暦以後 2尺8寸~9寸 江戸後期帯結巾 — がつ結巾、昔々結巾、路為結巾、引かけ、太鼓結 (角丈太鼓) 江戸後期の振袖は、大為・雅本・濃縮は町人の娘達も平生も着用した。
明治時代	明治時代は、江戸結巾、お召等がハヤカワの和服 女学生の袴が流行 鹿鳴館の洋服が流行

(帯の変遷)

奈良時代(倭文帯) → 平安時代(中納言・実用帯)後に小袖の上の細帯となる。

室町時代 2寸~2寸5分中

江戸時代

慶長 ~ 寛文 3寸中

延宝 ~ 元禄 ~ 天和 5寸~6寸中

享保 8寸~9寸中

文化・文政 1尺5分中

小袖時代

髪型 — 垂髪から締髪へ

- ① 兵庫留
- ② 島田留
- ③ 勝山留
- ④ 鈴留

大きく分けると4つに分類される。

① 幕府のおいらん役にみられるもの。

② 今の文金高島田の元

③ 湯女勝山の工夫した髪 — 後世の丸留

④ 加賀藩代官の丸留政綱の留で知られる。

